へ入にければ、方屋にて願立てけり。……昔の阿呆は、さる相撲をなん取りける。今の各まさに仕なんや。

相撲好きの親が、その性分のために狂態を演じ嘲笑され、失笑をかう構想は、後の西鶴によって『本朝二十不孝』でも普遍化されているし、江島其磧も『浮世親仁形気』でその構想を模倣した。また、第六十五段の「大傾城屋」での遊女と客のおりなす男女の交歓の相、駈落ちの不成就による哀感を排除させる男の「声はおかしうて阿呆気に歌ひける」狂態などを構図化した咄、第六十九段の「博奕打」の狂態など、これら三章段は、『仁勢物語』全体の中にあって、よく統一された狂歌咄であり、その方法化の完成度も高いものと認められよう。このようにただの原典のもじりにとどまらず、一段と複相化された戯笑性は、『仁勢物語』に独自の文芸性を与えている。



仮名草子の方法の未分化は、近世文芸としての成立の可能性を内在していた。『仁勢物語』でも、一方では狂歌的発想により世俗と交歓しながらも、客観化された世俗の戯笑性は、他方では世俗を観照的態度でとらえ、ひたすら卑俗化へと収斂させる俳諧的発想による滑稽化の方法が模索された。ここにいたって『仁勢物語』は編著者の言語遊戯の域を脱して、近世戯作文芸の萌芽としての文芸性をもつこととなった。

注① 「仮名草子」（岩波講座『日本文学史』近世Ⅰ）所収。
② 『日本国語大辞典』（小学館）
③ 『仁勢物語』解説（日本古典鑑賞講座『御伽草子・仮名草子』）所収。
④ 「仮名草子」（講座日本文学近世編Ⅰ）所収。

（おはら・とおる　大阪府立門真西高等学校教諭）

# 「思はぬ方にとまりする少将」小考

## ――短編物語の手法――

野村倫子

### 一　題名の担う役割（序章に代えて）

短編物語にとっては、短い中に主題と場面をいかに簡潔にまとめ得るかが生命であろう。主題を強く前面に押し出すという点で、題名そのものが内容と直接的に関わる場合が多い。長編の場合には、『源氏物語』『狭衣物語』のように主人公の名前を漠然と冠するだけで、個々の事件を暗示するようなものはない。それに対して、短編の場合、題名そのものが、本文を紐解く前に内容の一端を担って、読者に相対している。むろん、題名がそのまま素直に手の内を見せているわけではない。時には、題名によって読者に先入観を抱かせておきながら、最後にひとひねりしてみせる手法をとることもある。例えば『堤中納言物語』におさめられた「花桜折る少将」は、女性を手に入れる意味の標題を冠しながら、いざ盗み出してみると、それは思いを寄せていた姫君ではなく、老いた尼であったというおちでまとめられている。

「思はぬ方にとまりする少将」の場合も、古歌に通じているほどに題名によって足元をすくわれるようになっている。物語の荒筋は、大納言の遺児の姉妹が偶然にも権少将と少将を各々の配偶者として通わせ、男の官位の類似から、誤って我が夫ならぬ男と一夜を過ごすというものである。「花桜折る少将」と同様に「取り違え」を主眼に置いている。

さて、「思はぬ方にとまりする少将」の題名は『拾遺和歌集』の源景明の歌に拠るとされる。①

女のもとにまかりけるを、もとのせいし侍りければ
源景明

風をいたみおもはぬ方にとまりするあまのを舟もかくやわぶらん②

右の一首を知る者は、まず男が本妻とは別な女性と交渉を得る話かと予測するであろう。しかし、物語は、「思はぬ方にとまり

する」のを男（達）ばかりではなく、故大納言の姫君達もそれぞれに自分の妹の、あるいは姉の夫と会うという二重の「とり違え」を用意する。

題名がすでに物語の内容の半分以上を暗示している以上、読者の興味は自然といったいどのようにして取り違えが起こってしまったのかという一点に焦られてこよう。短編物語の主題の展開について同じ『堤中納言物語』の他の二・三の作品を例にあげよう。まず、「ほどほどの懸想」を考える。下仕えの童どうしの幼な恋に始まり、直接にその主人である男と女房が恋仲となり、最後には、男の主人の頭中将が、女房の仕える式部卿宮の姫君を見初めて物思いにふけるところで終る。わずか五頁半ほどの物語は、その後、頭中将と姫君が幸福になったのか、それとも男君が求道の志をつらぬいて俗世を離れて恋が終わったのかは描かない。「いかで言ひつきし」など、思しけるとかや。[3]」と、読者に状況を投げ出す。短編物語としての主眼は、童達の幼な恋が、やがて、貴人の主人たちの仲らいへと階級を順々にふんで発展してゆくところにあった。そのため、主人達の仲にいたってしまえば、それ以降の成り行きは語る必要がない。また、「逢坂越えぬ権中納言」は、宮の姫君に思いをを寄せた男君が、寝所へ侵入して姫君と対面しながら、拒絶されて「逢ふ」ことがかなわなかったという筋になっている。小学館版の十頁のうち、六頁半までが「根合」の行事の描写にさかれている。むろん、姫君への想いが成就しない嘆きを表出する効果はある。ただ、物語自体は、姫君と相愛になれなかった身を嘆く一首で閉じる。これきり二人の仲は絶えてしまうのか、今一度相会う機会が与えられるのか、語られない。「逢坂越えぬ」現在で、物語の時間は停止する。

物語の展開と題名が不可分の関係にあり、題名からはみ出た、本文に描出されなかった部分は不問にされる。その先は読者の自由な読みにゆだねられて、幾つもの恋物語になり得る可能性を孕みながらも、長編化して固定することを拒んでいる。ところで、短編物語においては、その主題にたどりつくまでの根回しが堅固でなければならない。ほんの一瞬のクライマックスが、より効果的でなければならないからである。例として示した二作の短編物語は、どちらかといえば恋の情緒を描いていた。それに対して、「思はぬ方にとまりする少将」は、いかに「思はぬ方」に泊まり得たのかという状況設定にかなりの分量をさかざるを得ない。そして、いきおい筋書きを重視し、事件の展開を可能にする下地作りが中心となる。男君が姫君を見染めてから恋に入るまでを描いた他の作品とは質的に全く異なってこよう。そのためか、この作品には自然や風景の描写がまったくない。同じ『堤中納言物語』の他の作品を見ると、前栽の花々とやんごとない女人を主題とした「はなだの女御」（山岸徳平氏の角川文庫では「花々のをんな子」をとる）は当然のことながら、短い中にも前栽の百花撩乱のさまが描きこまれる。また女の屋敷を垣間見する男君の視点からの描写は「花桜折る少将」や「虫めづる姫君」、あまり詳しくはないが「貝合」にみられる。また、「花桜折る少将」では、夜の京中、ある



いは思い悩んで見る庭などが描出され、「このついで」にも中納言君の話の中に、寺詣での際の山の景を織り込む。以上に対して第二グループといえる残る四編には自然や景物の描写が少なく、また、個々によって描写の軽重が異なる。「逢坂越えぬ権中納言」と「ほどほどの懸想」は、冒頭で時節を示すために点描される。前者は『古今集』や『拾遺集』の古歌を引用した美文にしたて、印象や観念の世界とも実景ともつかない表現と化している。また、本文の「根合せ」の菖蒲も宮中の遊びに組み入れられたものであり、自然のものではない。後者の冒頭は賀茂祭の「葵」をさりげなく置く。本文にも文遣いの小道具に「柳」を使うだけで、主題の「相応の恋」の発展に微かな彩をそえるだけである。次に、「はいずみ」は白粉と墨を誤って顔に塗った「むすめ」の喜劇である。この「むすめ」のために家を出た先妻が里に帰る場面で「月」が効果的に使われる。男の家を出るための車を準備するのを待ちながらの妻の一首、妻を出してからの男の一首、別々に見た「月」を互いが独詠する。妻が男に伝えた「涙川」の贈歌が男の心を揺らせて返歌を詠ませ、やがて二人の仲は旧に復す。一方、「むすめ」の方は、男の来訪をうけて、慌てて「掃墨」を顔に塗りたくって、男の心を離れさせてしまう。「二人妻」の夫争いという主題で新しい妻との別れが「掃墨」である一方、本つ妻との復縁が「月」を中心とした贈答である。主題と切り結ぶ「月」ではあるが、描写にはさほど筆が費やされてはいない。残る「よしなしごと」であるが、これは僧侶が布施を要求する破格の消息文であり、物語としても異端のものである。もとより自然や景物との交流を必要としない。いささか他との比較が長くなったが、「思はぬ方にとまりする少将」は、大きく分けた第二グループに属するといえよう。姉君が夫の訪れの間遠を怨じて詠んだ手習に対して、少将が返歌した中に「軒のしのぶ」の一語が見られるにすぎない。実景というよりも、姫が「かれ（枯れ・離れ）行く」という掛詞を使用したために、それを否定するために少将が巧みにきり返した技巧とみるべきであろう。もちろん、二人の姫君に男達が通うようになった契機も、クライマックスの「とり違え」も、すべて室内の事件である。そこでは人物の個々の動きに焦点があてられ、心の微妙な動きや自然を観照する必然性がなく、季節の移ろいもまた不問にされる。第二グループの諸物語が、どちらかというと筋立を重視したものであることは異論のないところであろう。しかし、「よしなしごと」を除いた他の作品と比較してみても、「思はぬ方にとまりする少将」については主題の「とり違え」にいたる段階で、小道具としてさえ自然や景物が顔を出さないのは、ひとつの大きな特異点といえよう。

## 二　脇役

### 1

また別な角度からこの物語を分析してみよう。二組の「とり違え」が起こるために種々な設定がなされていることはいうまでも

ない。まず、両親を失って後見人のない生活をしていること。二に、姉妹がそれぞれに少将・権少将という類似の名（官位）をもつ男君を通わせたこと。三に、男君達の訪れが間遠であるために、姫君の方が時折男君の招きに応じる習慣ができあがってしまったこと。そして、四に、男君が互いに婚姻関係で系図的に結ばれていて、両者の生活空間に共通の場があったこと。以上のようなことが挙げられよう。物語の「取り違え」を完成させる必要条件である右の事項の説明が、姫君と男君達との交渉の場面のあいまをぬうように、効果的に重ねられてゆく。

全体の構成を次に示す。

○序
1姫君達の生い立ち
2姫君の結婚――少納言の手引
3少将、父の右大将にいさめられる
4姫君の物思い――少将と歌を贈答
5中の君の乳母子の夫（左衛門尉）は、右大臣の子息の少将の乳母子であるということ
6中の君の結婚――乳母子夫妻が仲立ち
7（権）少将、父の右大臣にいさめられる
8姫達、男君のもとに迎えられる時々がある
9権少将、左衛門尉の不在によって侍を使者にして中の君を迎えにやる
10侍従、ねぼけて姉君を送り出す
11少将、清季を遣わし、弁の君は中の君を送る
12翌朝の贈答――男君達はあらぬ方の名乗りをする
○付言

西木忠一氏は、全体をもっと大まかに六項目に分けて、物語の構成の対応性と単調性をいう。④つまり、姉君と中の君のそれぞれの男君との出会い（右の2と6）と儘ならぬ仲（右の3と7、4と8）の描写、姉妹の女房の侍従や乳母子の弁の君の対応（右の9～11）によるとり違え」と事件の翌日の姫君達の心中描写（右の12）が「展開のしかたが同じ」であって「単純すぎる」と結論づける。「とり違え」をされる姉妹や男君の描出は確かに類似的で単純であり、まさに西木氏の言われるとおりであろう。しかし、この一見単純に見える構成の中で、真に「とり違え」の事件をひき起こしたのは侍従や弁の君であることが明確になる。

ストーリィ中心の短編物語が主題となる事件を少ない分量の枠の中で印象的に展開する時、社会的制約の多い貴顕の人々を行動させるよりも、身軽な女房クラスの人々を行為者とする方がより効果的であろう。この視点から、右の12項目のうち1256～11について、先行の諸作品の種々の方法の引用を確認しながら、分析と私見を加えたい。分析に際しては、前半部の1256、いわば舞台・状況設定の部分と、9～11の主題ともいうべき「とり違え」にそれぞれ焦点をしぼる。

## 2

冒頭近く「はかばかしく御乳母だつ人もなし。ただ、常に候ふ侍従、弁などいふ若き人々のみ」しかいないことが記される。しっかりした後見人をもたないことは姫君達の生活が不安なもので、将来にわたって人生が決して安泰ではないことを示す。『源氏物語』の末摘花や宇治の大君と中の君姉妹などの宮家の姫君さえ、両親をなくし、親身に世話をする縁者にめぐまれない時には不本意な生活を甘受せざるを得ない。「思はぬ方にとまりする少将」が、特に「宇治十帖」の大君と中の君を念頭に置いていたであろうことは、冒頭の状況・人物設定のみならず、本文の随所にうかがえる。⑤「宇治十帖」の薫と大君の恋愛と葛藤は、女君の父八宮の死によって始まる。幼時に母を失い、長じて身を処すための保護者を失う。そして、自分自身の才量にたよって諸事に対処せざるを得ない事態に直面することが、物語を光らせる。当然、実社会にも生じ得たことであろうが、保護者もなく、生身で社会に放り出された姫君の設定だけで、読者は容易にその生活を想像し得たであろう。一章でも述べたとおり、この物語は自然の描出、荒れた家屋や前栽などの一々の描出に筆を費やさない。人物の設定だけで、たとえば『源氏物語』「蓬生」の故常陸宮邸や「宇治十帖」の故八宮邸などの荒廃した家屋や前栽の様を十分条件として補ったであろう。そして、姫達を置く空間・社会的な状況は当時の読者の誰にもほぼ同一のものが再現し得たはずである。

ここで「侍従」と「弁の君」の二人の女房が配される。乳母も老練な女房もいない。「人目まれ」になり、よるべない姫君のあはれさが強調される。

世に捨てられたような姫君に、突然、右大将の子息である少将が求婚する。「知るよし」について具体的な事情は示されない。しかし、「少納言の君とて、いといたう色めきたる若き人」が手引する。小学館版の頭注にいう通り、かねてより「手引きを頼まれていた」のであろう。物語中、少納言の君はこの場にしか登場しない。いかなる人脈で少将とつながり、仲立を依頼されていたのかは語られない。長編物語である『源氏物語』に登場する恋の仲立人を何人か示してみると次のようになる。

| | | |
|---|---|---|
| 末摘花 | 大輔命婦 | 「いといたう、色好める若人」⑥ |
| 女三宮 | 小侍従 | 「物深からぬわか人」⑦ |
| 浮舟 | 侍従 | 「若き人」⑧ |
| 〃 | | 「色めかしき若人」⑨ |
| | こもき | 「色めきて」⑩ |

「若く」「色めかしい」、まだ女房とも正式に認められない者達が、恋の仲立をつとめたといえよう。もちろん例外もある。宇治の故八宮の姫君と薫・匂宮の仲立ちを承認した弁の尼は、わけあって八宮邸に身を寄せていた「おい人」⑪であった。また、同じ長

編物語の『狭衣物語』には、狭衣と女二宮の中に立つ女官として中納言典侍が設定される。主人公狭衣大将（十八、九歳）の乳母の妹に当り、女二宮の母の皇太后宮に出仕している。[12] ただし、狭衣と女二宮の婚姻そのものは姫宮の父帝（のちの嵯峨院）の勅命であった点[13]や、中納言典侍が不在であったために、かえって狭衣が女二宮に接近して袖を交わす結果になったこと、[14] さらに以降も狭衣からの一方的な求愛の文遣いをたびたびくり返す点[15]など、右表にあげた人物達とは根本的に性格を異にする。「思はぬ方にとまりする少将」の少納言の君の場合も、右に示した「若く」「色めかしい」人物と同様に、結果も考えずに、いまなり姫君の寝所に少将を通したようである。事の次第について、語り手は「例のことなれば書かず」と省筆する。「例のことなれば」の一言で、「若菜下」の柏木と女三宮や『狭衣物語』の狭衣と女二宮、密通事件でなくとも、『落窪物語』の道頼と落窪姫[16]や『夜の寝覚』の権中納言と中の君[17]など、男女両主人公の初めての出会いについては、これらの先行諸作品の印象を手掛りに、読者の「読み」にすべてをゆだねる手法をとる。

また、成行きに身を委ねた姉君の性格も、のちに「とり違え」を生じるための伏線の一つに計算されていよう。「とり違え」という主題をもつ諸作品を比較した吉田美枝氏の論は、女性の対応のし方を特にクローズ・アップすることで各作品の内で「とり違え」がどんな意味を帯びてくるかにまで言及する。吉田氏が対象とした[18]作品は『源氏物語』の「空蟬」と「椎本」をはじめ、『とりかへばや物語』、『有明の別』である。氏の言う「登場人物の無意識性」こそ、この短編物語を支え得ているものである。ただし、それぞれの物語に登場する女性の性格については、男君が実際に侵入する「とり違え」の場のみを比較しなくても、男君との交流の最初からすでにうかがい得られるのではなかろうか。出会いの際にみせた「無意識性」こそ、物語の主題であり、叙述の目的である「とり違え」に増幅されてゆく。

男君を通わせた最初から、この姫君の運命は、女房達に繰られることになっていた。

### 3

次に第5項目の中の君の成婚をめぐる場面に目を転じる。姫君の承諾もなしに男君が踏みこんでくる点では姉君の場合と同様である。しかし、ここでは、男君と中の君を結ぶ人間関係が明示され、また、少納言の君ほども軽くない女房によって仲立ちされた点が、前段で言及した姉君と少将の場合とは異なっている。

中の君の乳母はすでに世を去っており、その乳母子（女房名は不明）が、右大臣の息子である(権)少将の乳母子の左衛門尉の妻となっている。つまり、乳母子どおしが夫妻であって、その縁から(権)少将が中の君に興味を抱くにいたる。情報の伝達に乳母子たちが一役かっている。乳母子の婚姻によって主人の恋愛の仲立ちとなるものに、古く『落窪物語』の阿漕と帯刀の例がある。[19] ただし、帯刀は道頼の乳母弟とわかるが、阿漕の方は、落窪姫君の母が在世中に童として仕え、母君の没後もひきつづき姫君の後見となっているが、乳母子との記述はない。また『源氏物語』の女三宮と柏木の場合は、それぞれの乳母が姉妹である。[20] そして、女三宮の乳母の中納言乳母の娘である小侍従が、柏木から女三宮へのとりなしを懇願されて、ついに柏木を女三宮の寝所に導くにいたる。[21] 「思はぬ方にとまりする少将」の場合も、(権)少将の求愛に対して反対していた姉姫君の不在中に、乳母子が男君を導くことは、いともたやすきことであったろう。

ところで、この乳母子は、冒頭に名前を示された「侍従、弁」という「若き人々」とは重ならない存在なのであろうか。姉君と少将の仲立ちは少納言の君と明示されたが、ここでは乳母子という以外は語られない。姉君に対してはともかく、中の君に対する影響力は絶大であったようである。

姉君が「太秦に籠りたまへる折」に、中の君は(権)少将の妻となる。帰宅した姉君の言葉、「いかでこの君をただに人々しくもてなしきこえむと思へるを」とは、日々日常の姉君の思いだけではなかろう。太秦に籠ったそもそもの悲願が、この中の君の幸福ではなかったか。幸福を祈願しに参詣する間に、中の君の運命は皮肉にも姉君と同様の「いと頼み難」い男女関係に搦めとられる。あたかも『源氏物語』の「手習」を再現するかのようである。[22] 横川の妹尼が、故女君の代りに浮舟を手に入れた喜びを初瀬の観音に報告に行く。その留守に、娘代りにかしずきたてることを楽しみとしていた浮舟が出家を遂げ、妹尼君が落胆する。姉君や妹尼君は我が身の不幸は甘んじて受けるが、せめてもの幸福をつかんでもらいたいと念じた相手、中の君や浮舟が自分とまったく同様の道を歩むのを見た落胆は共通のものであろう。

姉君は「人々しくもてな」そうとした意図が裏切られたにとどまらない。「世の人」への気がね、「なきかげ（＝両親）」への想いに責められる。このあたりは、「宇治十帖」の「総角」で、中の君を匂宮に嫁がせたあとの宇治の大君の苦悩の表出と酷似する。[23] ただ、異なるのは、宇治の大君は妹の不幸を見て、自らの結婚に対して否定的になる点である。

『やうの者』と、人笑はれなることを添ふる有様にて、なき御影をさへ悩ましたてまつらんが、いみじさ。[24]

匂宮が宇治まで赴きながら、八宮邸を素通りするのを見て、大君は中の君の不幸を嘆く。世間や故両親の名誉などを憚かり、自らを責めつけた大君は、やがて病没する。大君の苦悩は「宇治十帖」を貫く精神であり、思想的にも高い。しかし、故大納言の大君は「契りくちをし」とは思うものの、やがて中の君を(権)少将の隠し妻的存在に置くことを「言ふかひなき事」と納得し、不満は残しながらも肯定する。ここで、二人の大君の処世観を比較追求することはできない。「思はぬ方にとまりする少将」の記述はあまりにも短かすぎて、思想性に言及することが不可能であることによる。逆に、そのことが短編物語の性格をよく示していることになろう。つまり短いスペースの片言から、同様の場面・情景をもつ先行の物語を再生し、言葉の不足を読者のイマジネーション

で補うことを積極的に意図したといえよう。

前節とともに、設定については次のようにまとめられよう。少納言の君や乳母子によって男君を通わせる経緯は、脇役の働きが直接的な契機であり、また物語の細部の描写は省筆され、その情緒的部分は先行の物語に依存する執筆姿勢が明確である。

## 4

後半、主題の「思はぬ方にとまりする」場面を分析する。

(権)少将と少将の二人の共通の場として、右大将北の方の邸が明示される。中の君と(権)少将の結婚は少将のあずかり知らないところであった。二人の少将が親しいことはここにいたってはじめて語られる。「右大臣殿の少将は、右大将の北の方の御せうと」と姻戚関係が説明される。ついで「右大臣の少将」が「権の少将」であることも示される。右大将北の方は、少将にとっては母(あとに「母上」とある)であり、権少将にとっては姉(異腹か)に当る。この右大将北の方の病気に、見舞を口実とした男君達はそれぞれの父親の監視の目を逃れる。

まず、権少将が中の君を呼ぶ。ところが、既に読者にもなじみの左衛門尉が不在であり、代って、侍が遣わされる。左衛門尉が使者であれば、妻は中の君の乳母子であり、姫達の邸にあっても、相手を「とり違え」する筈がなかった。

ところで、姉妹の境涯を記述した冒頭近くで名を明記された弁の君と侍従がここに登場する。権少将から遣わされた侍を迎えて、侍従は「ねぼけたる心地」で対応して、いずれの姫にとも確認をしない。ここに第一の「とり違え」が成立する。女房の眠気によって別の男君を姫の部屋に通す趣向は、「浮舟」の右近が初出である。単に相手を違えるのであれば、『落窪物語』[25]の道頼と面白の駒の如く意図的に婿の男君が入れ替わる例もある。しかし「入れ替り」と「とり違え」は、意図的であるか遇然の結果か、また立場によっても、まったくの別物になる。それゆえ、「浮舟」の右近が薫を装って宇治を訪れた匂宮を薫と誤認して浮舟の寝所に導いた場面を、「とり違え」の最初とする。

(前略)右近、

「いと、ねぶたし。よべも、すゞろに、起き明かしてき。つとめての程にも、これは縫ひてん。いそがせ給ふとも、御車は、日たけてぞあらむ。」

と、言ひて、しさしたる物ども、とり具して、几帳にうちかけなどしつゝ、うたゝ寝のさまに、寄り臥しぬ。(中略)右近、聞きつけて、「誰そ」と、言ふ。こわづくり給へば、「貴なるしはぶき」と、きゝ知りて[26]、「とのの、おはしたるにや」と、思ひて、起きて出でたり。

「浮舟」では、縫物に追われていたという理由づけがされ、さらに、薫の迎えがあることが予測されていた。そのために、右近は翌朝の来訪が早まったと考えて、匂宮と気付かないままに浮舟の寝所に入れた。「思はぬ方にとまりする少将」では、何故、侍従が「ねぼけたる心地」であったかの説明は不要である。物語のなりゆきからみれば、姉君の時にも少将の来訪は「思ふほどにもおはせず」の状態であり、中の君に対する権少将は「今一方よりは、いと待遠」と、稀な訪れに慣れきっていたとみえる。この右近の「ねぼけ」心地を、小学館版の頭注は次のように理由づけする。「年とった乳母などとちがって眠いさかりである」。この理由はもっともらしくみえる。しかし、物語としての必然性はいかがか。侍従の君の誤ちも、また、先行の作品に引きつけて言外の景を補って、短編作品なりのまとまりを狙ったものとは考えられないか。第一の「とり違え」によって姉妹とその男君達の完全な「とり違え」がなされる山場で、描写のみならず、主題と直接的に関係する侍従の行動に至るまで、事件の展開にさえ、オリジナリティーの閉塞が認められる。

侍従は大君にとって一番の女房であるらしく、少将邸に同行する。

姉君は、何の疑いも抱かずに権少将と親しみ、「やうやうあらぬ」と気付く。権少将が少将に「いとよく通ひ給へれば」と断われてはいるものの、姫君のたよりなさが露呈する。このような性格の設定は前に引用した吉田美枝氏のいう「登場人物の無意識性」を計算し尽してのことではあるまい。やはり、「とり違え」を生じた侍従の対応の叙述と同様に「浮舟」を意識しての結果であろう。

初めより、あらぬ人と、知りたらば、いさゝか、言ふかひもあるべきを、夢の心地するに、やう〳〵、その折の、つらかりし、年頃思い渡るさま、の給ふに、この宮と、しりぬ。[27]

浮舟をかきくどく言葉によって、浮舟は薫ではなく匂宮と気付く。女房の右近は翌朝まで気付かない。そして自分の誤ちに気がつくと、匂宮と浮舟の仲を「宿世」と割り切って、匂宮の宇治来訪の際には一人で世話をとりしきる。一方、「思はぬ方にとまりする少将」の大君は「御けはひ」が違うと気がついても「引き被」くばかりで、その場から立ち去ることもしない。むしろ、侍従の方が、姫君にこの難をのがれるように発言をするが、姉君は権少将から開放されない。結局、侍従は「泣く泣く几帳の後に居」るしかなかった。「浮舟」の右近は積極的に自分のとるべき道を選んだが、姉君付の侍従は事態に身をゆだねる他ない。

第二の「とり違え」は「今一人の少将の君」が姉君を迎えに寄こすことで完成される。こちらは、慣れた清季が遣わされる。しかし、姉君はすでに男君に迎えられたあとで不在のため、邸内の人々は、当然、中の君への迎えと思いこむ。そして、中の君を仕立てて車に乗せた。同行した弁の君は、御車寄での少将の語り方からすぐに権少将とは異なると気付く。弁にうながされて、中の君も人違いと心得た。しかし、男君の方は人違いに気付いて、逆に興味をそそられて、姫君を抱きおろす。車を境とした女君主従と男君の緊張関係という趣向は「東屋」にすでに見られる。「東屋」では、薫が浮舟を三条の小家から宇治に連れ出そうとして、一旦は弁の尼や人々に押し留められるが、結局は侍従や弁の尼を同伴して浮舟を車にかき乗せたのであった。

かき抱きて、乗せ給ひつ。誰も〳〵、怪しう、あへなきことを、思ひ騒ぎて、（中略）と、嘆けば、尼君も、いと、いとほしく、思ひの外なることゞもなれど、（中略）と、言い慰む。[28]

「東屋」の弁の尼は未来をいろいろとは言わない。今は亡き大君に浮舟の面影を重ねては記憶をたどり、過去にとらわれる。一方、中の君付きの弁の君は、今現在の姫の処遇に泣くよりほかはない。二人の弁は物語の流れにそってみれば、まったく異質である。ただ、弁という女房の名前と、車と屋敷の境という空間と、男君と姫君の出会いと三つのかすかな接点を有するだけである。にもかかわらず、突然浮舟を宇治に連れ出した薫に対して慌てる弁の尼と、夫の権少将ではなく別の男君が中の君を抱きおろそうとしているのに気付いて狼狽する弁の君の一瞬とり乱した心理だけは、奇妙に重なっている。

「とり違え」の翌朝、差し出し人の名前を違えた後朝文を、弁と侍従の二人の女房が受け取ってそれぞれの女君に「見せ奉」る。

後半部分は、この短編物語の主題であり、独自性を発揮すべき場であるにもかかわらず、要所要所で先行の「宇治十帖」を思わすにはいられない描出に終始する。あたかも、創造という営みを拒絶しているかの観すらある。

そして、また、前半と同様に姫君の意図を無視して、女房達が事件をひき起こす。しかも、冒頭で「はかばかしく御乳母だつ人もなし」として、「ただ、常に候ふ侍従、弁」とされた人である。男君を通わせるきっかけとなった少納言や乳母子は、この二人ほど主だった女房ではなかったかもしれない。にもかかわらず、もっと軽卒なことを、頼みとすべき弁や侍従が犯してしまった。しかも、女君はもちろんのこと、男君も女房も、この新しい関係を積極的に意図したわけではない。ただし、男君はまんざらでもなかった。権少将は大君と出会って「ただにはあらず、優に思さる事もありけむ、いと嬉しき」と思う。少将は中の君を迎えて、「日ごろも、いとにほひやかに、見まほし」く思っており、「人知れず思ひ渡り給ひける」有様であった。しかし、積極的な行動をとろうとはしない。片や『源氏物語』では、匂宮は意図的に薫を装い、女房の右近は誤ちを「宿世」と受けとめ、弁の尼も積極的に薫の立場を擁護した。ただ、「宇治十帖」の場合には、「思はぬ方にとまりする少将」の姫君の立場に相当する浮舟だけが、「東屋」「浮舟」いずれの場合も事態に身をまかせている。姫君達の場合は、吉田美枝氏のいう「無意識性」というよりも、無意図的というべきであろう。まさに、浮舟と同じである。しかし、その主体の弱さゆえに、逆に、浮舟の背負った苦悩には至らない。また、「とり違え」の恥ずかしさから、積極的に新しい男君に心ひかれてゆくとは見えない。

浮舟の場合、入水に至る過程で、侍従と右近の二人の女房の役割が重大である。[29] つまり、女主人公をテーマたる入水に追い込む役割を果たしているのである。「思はぬ方にとまりする少将」も同様である。「とり違え」の設定も実行も、すべて各々の女房が互いに加担している。その意味では、まさに「宇治十帖」の模倣であり、裏がえしといえよう。

## 三　冒頭と結び

以上、何ヶ所かを考察した「物語」への意識が、「序」と「結語」にこめられているといえる。

冒頭の序言についての諸論の要点は鈴木一雄氏によってまとめられている。[30] そして、論文の多くは、短篇物語における序と長編物語における序との差異を論じ、「思はぬ方にとまりする少将」の場合の序文の有効性に言及する。

たまたま、本文冒頭の侍従と弁がクライマックスに突然登場して首尾を照応させているからといって、そのことで序文と結語の統制がとれているとは言えない。この対応関係もさらに論じる必要があろう。

冒頭、「昔物語などにぞ、かやうのことは聞ゆるを」と始まり、「年の積りにけるほども、あはれに思ひ知られけむ」と、昔語りする古女房の口調で故大納言の遺児の姉妹の物語が始まる。が、とじめは「本にも侍る」と結び、さらに語り手の「はてゆかしくこそ侍れ」という感想と共に、再び「本にも「本のまま」と見ゆ」としめくくる。先の「本にも侍る」は、どこまでかかるのか定かではない。序語で、昔物語風な、と語り出したところから含んでしまうのか、それとも、「かへすがへす、ただ同じさまなる御心のうちどものみぞ、心苦しうとぞ」の一文のみを指すのか、幾つもの可能性を残している。いずれにしても、「昔物語」を引きあいに出し、「本」にあることを論拠とする態度は、やや歪みを残しながらも照応したといえよう。

右のような物語に対する意識が先述のような先行諸作品への接近と同化・融合を大胆に行わし得たのではなかろうか。先行の物語、特に「宇治十帖」の諸場面を想起させる執筆態度は、新しい手法、新しい世界への開拓を拒んでいる。筋の展開を追うことに主眼をおくと、いきおい切り捨てられる部分が増加する。そして、物語の描写や精神の奥行きが浅くなりがちになる。その欠点を補うものとして、先行物語の印象深い場面を思わせるキー・ワードを散りばめる。しかし、そういった類似の章句は、その当座だけの有効性しか発揮しない。一編を貫く思想性にはとうていなり得ない。長編物語のもつ人間の奥行き迄はうつすべもなかった。

## 結

短編物語は大きく二つに分けられよう。恋愛などの一コマに焦点を当てて描きこんでゆくもとと、筋本意の展開でひとひねりしたオチを楽しむものの二つである。もちろん、このような分け方からはみ出る物語も多々ある。「思はぬ方にとまりする少将」は筋本意の短編物語の中でも、特に先行の作品との相関が著しいので、対象とした。

短編物語の手法は二・三章で示したとおりである。そして、特に強調したいのは、二章の2～4項に共通する「宇治十帖」なく

しては、「思はぬ方にとまりする少将」は平盤な退屈きわまりない作品にすぎない点である。姉妹の設定だけで、宇治の山荘あるいは故常陸宮邸が喚起される。姉君と少将の交流が「いといたう色めきたる若き」少納言の君によって始まったことも、特に女三宮と柏木の仲らいや、浮舟と匂宮の関係と重ねられる。中の君の結婚を大君の太秦ごもりの留守に乳母子が独断でとり行なうことも、横川の妹尼君の落胆の様子とオーヴァーラップする。そして、「とり違え」の山場で、侍従が寝おびれて大君を権少将邸に送るのは、眠気におそわれた右近が匂宮とも知らずに浮舟の寝所に導くことをほうふつとさせる。また、同様に中の君に従った弁の君が姫を車から降ろすまいと思いながら、結局男君に運命を弱めとられるのも、浮舟を宇治に伴おうとした薫に対する弁の尼の反応と呼応する。このように、章句の隙間からほの見える『源氏物語』の影響力は、単に当代の世相を写す上に物語の場面に対する拘束力を発揮したといえよう。まさに、長編物語あっての短編物語であり、「思はぬ方にとまりする少将」の特徴ある手法と考えるのである。

注① 小学館「日本古典文学全集」の『落窪物語・堤中納言物語』ほかによる。

② 角川書店『新編国歌大観・第一巻』による。なお、「拾遺抄」第八巻では同じ詞書にさらに続けて「いひつかはしける」の一文がある。

③ ①に示した小学館のものによる。四六二頁。以下の引用及び頁数はすべて同書による。ただし、適時、角川文庫を併用している。

④ 「「思はぬ方にとまりする少将」雑考」（『滋賀大国文』第八号・昭45・12）

⑤ 小学館版の頭注に一々指摘がなされている。四八九頁**九**、四九〇頁**三**・**一〇**、四九二頁**一一**、四九六頁**一四**など。

⑥ 「末摘花」岩波書店「古典文学大系」『源氏物語』二三六頁以下、『源氏物語』については、巻名の下に、岩波古典文学大系版の巻数と頁数を示す。

⑦ 「若菜下」三　二二七頁

⑧ 「東屋」五　一九三頁

⑨ 「浮舟」五　二三九頁

⑩ 「手習」五　三八二頁

なお、三七八頁に「左衛門とてある大人しき人、童ばかり」とあるので、こもきは「童」に入るか。

⑪ 「総角」五　三八八頁

⑫ 岩波書店「古典文学大系」『狭衣物語』二　一二五頁

⑬ 同右　巻一　四七頁・五〇～五一頁

⑭ 同右　巻二　一二六～一三二頁

⑮ 同右　巻二　一三八～一四一頁・一八四～一八五頁・巻三　二二六～二二七頁・二七一～二七二頁・二七六～二七七頁・三二七頁

巻四　四一八頁

⑯ ①に同じ。「落窪物語」巻一　一〇〇～一〇五頁

⑰ 岩波書店「古典文学大系」『夜の寝覚』巻一　五五～五八頁

⑱ 「堤中納言物語研究――「思はぬ方にとまりする少将」の特質とその位置――」（東京女子大『日本文学』25号・昭40・11月）

⑲ ①に同じ　巻一　八三～八四頁

⑳ 「若菜下」三　三六七頁

㉑ 同右　三　三七一頁

㉒ 「手習」五　三七七～三九四頁

㉓ 「総角」四　四三九～四四一頁

㉔ 同右　四　四四一頁

㉕ ⑯に同じ　巻二　二一二～二二〇頁

㉖ 「浮舟」五　二一五～二一六頁

㉗ 同右　五　二一八頁

㉘ 「東屋」五　一九一頁

㉙ 拙考「浮舟入水の脇役たち――「東屋」から「浮舟」への構想の変化を追って――」（立命館大学『論究日本文学』46号、昭58・5）

㉚ 『堤中納言序説』（桜楓社　昭55・9月）二九二～二九三頁

**付記**　『国語と国文学』（昭34・4）所収の松村誠一氏「短篇物語の構成――堤中納言物語の諸篇――」（九九～一〇〇頁）では、物語の展開の他、「人違いの起こることを可能にする幾つかの条件」、「無用の人物というべきものは見当たらない。」などと私論と同じ手順をふみながらも、「この短篇が、長篇を思わせるものをもっているからではあるまいか。」と、全く逆の方向に結論づけておられる。

（のむら・みちこ　本学大学院博士課程）